

とを明らかにし、小乗は決して大乘ではない、と否定するのか。それは、小乗の中には、いまだかつてこの十の真理についてその一も解釈しているのを見ないからであり、また次に、この十の真理はこの上ない覺りを引き出して完成させ、道にまっすぐ従って、それることがないからであり、もろもろの生きとし生けるものが、一切の智慧（を得た者すなわち如来）の智慧を獲得するからである。

まず第一章のタイトルは、「まさに知られるべき〔ことの〕依りどころの勝れた相」で、具体的には「アーラヤ識」について詳しく述べられている。大乘仏教の修行者「菩薩が「知っておくべき、心の根源にある依りどころ」あるいは「知っておくべきこと、すなわち迷いと覺りの姿（次の章で述べられる）」が生まれてくる依りどころ」が、「小乗仏教よりも勝れている」という意味である。

つまり「撰大乘論」によれば、人間の心の深い底には意識ではわからない心の領域や働きがあって、それが様々な煩惱の根でもあり、同時に覺りを開くことのできる依りどころ・根拠にもなっているという。今は確かに汚れているがやがて修行しただけで浄らかなりうる心の底の領域があることこそが修行の依りどころなのだから、大乘の菩薩たる者はそのことをきちんと知っていなければならない。そういう人間の心のいちばん深いところを「アーラヤ識」と呼び、それについて小乗仏教は知らないが、大乘仏教は知っている、だから大乘は勝れている、というのがこのタイトルの意味である。

ここで展開される「アーラヤ識」説は、それ以前の学派には見られない唯識独自の重要な説の一つであり、そのためこれだけに全体の分量の約四分の一強が費やされている。心理学で言えば、もっとも原論的な「心理構造論」といったところだろう。

第二章は、「知られるべきことの勝れた相」で、「知られるべきこと」が勝れているのはなぜかを述べる。具体的には、世界のあり方・見え方の三つの側面、〈三性〉である。これもまた、〈アーラヤ識〉と並んで唯識の眼目ともいふべきもので、これにも全体の四分の一ほどが費やされている。これも心理学的に言えば、「心理機能論」と言ってもいいかもしれない。すなわち、アーラヤ識と三性がわかると、「大乗仏教の深層心理学」としての『撰大乘論』の半分がわかったことになるわけだ。

詳しくは後の章で述べるが、とりあえずごく簡単に述べておこう。

仏教の考え方では、それ自体で存在するものは何もない。すべての存在は、他との関わりの中で起こっており、縁起・無我・空・無実体である。

例えば、私たちは「私が私だけである・いることができる」ような気がしているが、ここに私がいることは、例えば床に支えられていること、その床を建物が支えていること、その建物を大地が支えていること、その大地は地球全体の一部であること、あるいはその地球に空気があってそれを吸っていること、その地球の水を飲んだこと、地球上の様々な生命を食物として食べたこと……教えはじめると果てしない、いろいろな「他」のものによって支えられて成り立っている。生命レベルだけで考えても、私だけで生きていられる私などというものは存在しない。

それは私だけのことではない。すべての存在は、私を含めて世界のありとあらゆるものが、それ自体で存在しえない。いつも「他に依って起こっている」という性格がある。これが存在の基本的な性格である。そのことを唯識では、〈依他性〉あるいは〈依他起性〉という。

ところが、私たちは、いろいろなものすべてを見て、他に依らずそれ自体として、実体として存在するという錯覚を抱く。特に自分について「私は私だけで存在している。誰の世話にもなっていない」といった

妄想を抱き、執着し、すべてのものが実体として存在しているかのように思つて、それに執着する。自分もものもみな分かれて別々に、それ自体であるかのように思つている。そういうものの見方・世界の見え方を「分別性」あるいは「遍計所執性」という。

しかし、本當に覚つた人には、ものの完全に完成した本當の姿・性質が見える。すべては本當は一体なのだという。私も読者も、宇宙のすべてのものはみな本来は一つである。それを「眞実性」あるいは「円成実性」という。とはいつても、それは、ドロドロ、ノッペラポーの混沌状態ではない。宇宙の中のすべての存在は、もともとみなつながつていて一つではあるが、仮にははつきりと、私とあなた、これとそれ、いのちといのちでない物……と多様に区別・区分できる。区分という意味では分かれているからこそ、いろいろなことが起こるのだ。

ところが、私たちふつうの人間凡人は、もの（者・物）がまざらばらに存在していて（分別性）、それが後で関係していろいろなことが起こる（依他性）と考えている。それに対して仏は、まず一体の世界があつて（眞実性）、それが仮に分かれていろいろな関係になる（依他性）と見る。どちらも、他との関係なしには何も起こらないことは認めているのだが、凡夫と仏とは、ものを見る方向・心の機能の仕方がまるで逆なのである。

こういうふうに、世界のあり方・見え方に三つの性格があることを、小乗仏教は十分認識していないのに対して、大乘ははつきりとつかんでいる。そのことが知られるべきだというのである。

第三章「知られるべきものの修得の勝れた相」では、そういうことをただ知的に分かるだけでなく、心の底からそう思えるようになるには、どうすればいいかを述べている。唯識の場合、唯識独特の「唯識

観」という瞑想をするのである。

これは「黙って坐る」坐禪とちがって、瞑想の中で理論的な洞察もしていくようなタイプの瞑想である。また、イメージを使い、一度イメージを描いて、それからそのイメージを消していくという瞑想もある。もちろん、そういうものが一切ない坐禪的な瞑想も行なったと思われるが、唯識ひいあゆ瑜伽ぎやう行派ぎやうはではイメージや知的な洞察を使う〈唯識観〉という瞑想法が特徴的で、第三章ではそれを述べている。

この第三章から八章までは、心理学で言えば、「心理臨床論」と言い換えることができるだろう。

第四章「悟入の原因・結果の勝れた相」では、唯識観という瞑想だけでなく、さらに〈六波羅蜜〉、六つの実践項目を行なうようにという。いわば心理的な自己成長—自己超越の臨牀的な方法論である。この六波羅蜜という方法は、小乗では整備されておらず、大乘仏教では確立されているという。

第五章「悟入の段階の区別の勝れた相」では、唯識観、六波羅蜜を行っていると、どういう段階を経て覚っているのかを述べている。修行を始めても、もちろんすぐに覚れるわけではなく、時間がかかる。時間がかかって、ぜんぜん進歩しないように見えても、本気でやれば少しずつ進歩する。それも、なだらかな坂道ではなく、一段ごとがかなり段差のある階段を登るといった感じで段階がある。「撰大乘論」によれば十の段階があるという。これは人間成長の段階論だと言っているだろう。

そのような修行段階の区別は小乗にはなく、大乘だけにあるという。小乗と呼ばれる仏教の派にも、修行の段階論はあるようで、これはそういう意味ではやや疑問だが、いずれにせよ修行者にとって段階論が重要であることは確かだ。

第六章「修行の相違の中で、特に戒律による学の勝れた相」では、六波羅蜜のところで述べられた（戒律）について、より詳しく述べられている。

それから第七章「瞑想による学の勝れた相」では、大乘の坐禪・瞑想・禪定が、小乗的な瞑想に比べてどういう意味で勝れているかを述べる。

そして、そこで得られる智慧についても、やはり小乗の智慧と大乘の智慧は違うというのが、第八章「智慧による学の勝れた相」である。

ここでまとめて述べられた「戒・定・慧」を仏教の三学という。先の六波羅蜜をやや角度を変えて、さらにまとめたものだと考えていいだろう。いずれにせよ、凡夫は、六波羅蜜あるいは三学を修行する菩薩になり、段階を踏んで仏に向かっていくのである。

第九章「学びの結果としての涅槃の勝れた相」では、修行の結果として到る、「生死」にも、それを超えた「涅槃」にもこだわらない境地が語られる。

古代インドの世界観では、私たちは一回生きて一回死んで終わりではなく、輪廻転生を繰り返すのであり、したがって「人生」とはいわず「生死」という。苦しい人生を過ごし、そしてまた死んでまた別の命に生まれて、また苦しむ。古代インドの人々は、そういうふううに果てしなく苦しむのを厭い恐れて、そこから抜け出したいと願った。特に修行者たちは、一所懸命そこから解放され・脱出する「解脱」を求めたのである。それは、煩惱の火が「吹き消されてなくなってしまう」という意味で「ニルヴァーナ涅槃」ともいう（「涅槃」は、nirvāṇa というサンスクリット語の漢字による音写）。

私たちはふつう、「涅槃」というと、苦しく嫌な生死輪廻から完全に解脱して、もう二度と生死にもどってこないことだと考える。ところが、大乘仏教—アサンガは、そういう涅槃は浅い涅槃であって、涅槃の境地にも生死輪廻にも自由自在に行き来できる涅槃こそ真の涅槃だという。そういう涅槃は、決まった住所がないという意味で「無住処涅槃」と呼ばれる。それが究極の姿であって、そこが、自分だけ安らかな境地・涅槃に入ったきりになろうとする小乗と違うのだという。

「覚り」という人間成長の究極段階に達するとのような生き方になるのか、やや表現が軽くなってしまうが、「ライフスタイル論」と言い換えることもできるだろう。

第十章で、そういう世界に至りついた仏には、根本的な仏と、形に現われた仏と、それから衆生のためにさまざまに形を変えていく仏と、三つの姿の違いがある。それを「三身」という。最後に、仏といっても三つの姿があるという三身説を述べ、人間はそういう無住処涅槃・仏の境地に入れるというのだ。

これは仏教用語では「仏身論」と呼ばれているものだが、人間成長の最高段階が仏に覚った人だという理解から言うと、究極の「パーソンナリティ論」と言い換えることもできるだろう（それをほみ出してしまふところもあるが）。

しかし、始めにもどって言うと、現状の人間は八識の凡夫である。この、凡夫から仏への無限に近い距離をつめるには、菩薩となって修行するしかないのだ。

このように「撰大乘論」では、人間の迷いと覚りの心理構造・パーソンナリティ構造がしっかりと論理化されている。全体像をおおまかに見ただけでも、きわめてシステムティックであることがわかるだろう。

この内容を、一章一章たどっていくと、人はなぜ修行しなければならないのか、理論的には納得させられてしまう。「撰大乘論」の内容がほぼわかったとき、少なくとも私は根本的に納得できたという気がしたものである。しかもそれは、私が仏教の信者になったということではなく、仏教のエッセンスには個別宗教のワクを超えた普遍性があることを納得したということなのである。

以下、その納得を読者と分かち合えるよう、できるだけ簡潔明瞭に「撰大乘論」のエッセンスを取り出してみたいと思う。

第二章 心の深層にあるもの（ア－ラヤ識）とは何か



## 一 アーラヤ識の名称と本質

菩薩が知るべき迷いと覺りの根拠

「撰大乘論」の第一章では、唯識の核とも言うべき概念である、人間の心のもっとも深い層としての「アーラヤ識」について、その名前の意味と本質が述べられている。先に言ったように、「心理構造論」とも言うべき部分で、内容の重要さに比例して分量ももっとも多く、全体の四分の一以上である。したがって解説も多くなり、本としての章立てのバランスを欠くことになってしまいが、その点あらかじめご了承いただきたい。

まず最初に、「知られるべき」ことの「依りどころ」は、アーラヤ識と名づけられる「(四二頁)」とある。アーラヤ識は菩薩が知るべきすべての存在の依りどころであり、特に知るべきこと(三性)の依りどころであるという。

ところで、現代の文献学・歴史学から見ると、大乘仏教の教えはそのまま釈尊が説いたとは言えない。

しかし、だからといって、現代人は大乘に意味がなくなると思わない。釈尊が語ろうが、他の誰かが釈尊の名を借りて語ってしようが、それ自体に意味があるかどうかが問題である。しかし古代の仏教徒にとつては、釈尊が説かなかつたことは仏教ではない。そこで、大乘の論師は、自分の主張について、釈尊がどの経でそれを説いているか典拠を示さなければならぬ。そこで、アサンガも「アーラヤ識」という概念の典拠になる経の箇所をいくつかあげながら、アーラヤ識の意味を述べている。

一つは「大乘阿毘達磨經」という經典の句である。

この界（領域）は、始めのない過去以来すべての存在の依りどころで、これがあるからこそ生命の（六つ）の種類（六道）の「差異」があり、また涅槃を得るといふこともある。（四二頁）

これは、「撰大乘論」全体の主張を一言で提示した句と言っている。「無始」＝始めの知れない無限の過去以来、すべての存在の依りどころとなっている、心の深い領域がある。六道とは、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天という仏教の神話的な世界の分類で、煩惱・迷い・苦しみが満ちている生存状態の世界である。つまり、アーラヤ識があるからこそ、苦しみ・煩惱があり、迷いの生存を繰り返すのだが、またそれがあるからこそ涅槃を得ることが可能になるのだ、という。

つまり、人間には心の深い領域があり、それこそが迷いの根拠であり、覚りの根拠でもある。言い換えれば、私たちがふつう自分でわかっているつもりを意識の世界よりもはるかに深い心の領域・層が存在することを想定（仮定といつてもいい）しなければ、人間の迷いと覚りという現象は解明できない、とアサンガは主張している。「迷いと覚り」という言葉の印象で古い話だと勘違いして読み落としさえしなければ、

これは驚くほど現代的な人間洞察である。

アサンガは、さらにもう一つの典拠をあげ、「様々な存在はアーラヤによって存在する」(四二頁)という。「アーラヤ」は「蔵」を意味する。よく知られている「ヒマラヤ山脈」の「ヒマラヤ」は「ヒマ」と「アーラヤ」の合成語で、「ヒマ」は「雪」、「アーラヤ」は「蔵」で、「雪の蔵の山」という意味である。つまり「アーラヤ」は、「蔵」すなわち一切の存在が芽ばえ育つ元になる種子が蓄えられ集められている場所を意味している。この言葉も經典の中にあると典拠をあげており、それがアーラヤ識の説明にもなっていく。

そこで先に進む前に繰り返し注目しておきたいことの一つは、アーラヤ識と呼ばれる心の深層領域が迷いと覚りのどちらか一方ではなく両方の根拠だと言われていることである。その内容については以下徐々に述べていくつもりだが、これは、唯識思想が人類の思想史にもたらした最大の洞察・貢献だと私は評価している。

#### 情報集積体

続いてアサンガは、經典の「頌」<sup>ほ</sup> 詩句を引用しながら、アーラヤ識の本質と名前を明らかにしていく。先の句の続きに、「もろもろの存在は、蔵(アーラヤ)によって存在する。それは、一切の種子ともいうべき識(情報の集積体)であるがゆえに、(アーラヤ)と名づける。私は、このことを、勝れた人(菩薩)のために説く」(四二頁)とある。

現代語訳の最初の部分では、アーラヤ識をあえて「情報集積体」という現代的な言葉に置き換えて意識してみた。私たちの心は、様々な情報が寄り集まってできており、一つの固定的な実体としてあるわけ

はない。そのことを明らかに示す例は、老人ほけ症状だろう。私は男である、父親である、こういう家族があり、こういう社会的地位と役割があり、こういう財産を持っており、〇〇市民で、〇〇県民で、日本国民である……といった様々な情報の記憶が、ほとんど無意識化して心の中にまとまりをもって保存されていることよって、人格のまとまりがついている。もし一つ一つの記憶が失われ、回復不能になっていくと、人間は人格崩壊を起こす。少なくともふつうの意味での人格的生活は送れなくなってしまふ。つまり、心の奥に情報が集積されていることよって、ある一つの個体的な命であるかのように私たちは存在している。だから、もしその情報をすべて消去すると、個人・人格は實際上崩壊してしまふ。

そういったことを現代的に表現するために、「情報集積体」と訳してみたが、ある一つの思想の中核をなす概念は、翻訳しても、訳語の語感よってかえって誤解を招くだけの場合もある。《アーラヤ識》のように重要で独特な概念は、あえて訳語を当てるより、そのままにして、その意味内容を学び、記憶していただくほうがいいだろう。

ところで、ここで注目しておきたいのは、「私はこのことを、勝れた人のために説く」、逆に言えば「勝れていない人のためには説かない」と言われていることである。勝れていない人とは、まず、とにかく自分の迷いの存在が迷いの存在だと気づいていない人、そこから脱出しようという気のない人、ふつうの人、凡夫である。それから、この世が苦しみに満ちた世界だと思ひ、そこからひたすら抜け出したいと思う人、<sup>「二乗」</sup>「<sup>「二乗」</sup>声聞・独覚」といった人々も、大乘仏教の立場からいうと、勝れた人々ではない。

つまり唯識は、自らも覚って救われ、他者をも覚らせて一緒に救われることを目指す勝れた人、菩薩のためにこそ説かれている。要するに、菩薩、修行者、実践者の学なのだ。だから、覚りたいという気持ちのない凡夫や、自分だけ覚ればいい、自分だけ救われればいいという声聞・独覚には説かない、と厳しい主

張を示している。

「撰大乘論」は、まさに大乘仏教のエッセンスを包括的に説くものであり、大乘はどこが小乗と違うのかという自己主張を、非常に強く主張する。そして、小乗はこういう意味でダメなのだ、と厳しく指摘する。そういう意味では、仏教も、一般的にイメージされているほどいつも寛容だったわけではなく、やはり内部でそれなりの相違・対立があったことがわかる。

#### アーラヤ識の三つの意味

続いて、ではなぜ心のもっとも深い領域を「アーラヤ識アライヤシ」と呼ぶかを説明して、「蔵」には三つの意味があるという。蔵の中に能動的に蓄えることを「能蔵ノウゾウ」という。蓄えられている状態を「所蔵ショゾウ」という。それを、いわば宝物・財産のように、実体視して執着することを「執蔵シヨウゾウ」という。

唯識は、この生での命が終わっても、ある種の生命情報のようなものが後に残り、それによって輪廻すると考えた。生きている間に様々な煩惱を起こし、汚染された生き方をするとその結果、体は死んでしまってもその情報が蔵のようなところアーラヤに蓄えられていく。それが「能蔵」である。

蓄えられている状態が「所蔵」で、それはやがて時がくるとまた芽吹いて、次の存在を生み出す。つまり、まず前世の存在の結果として蓄えられているものが、やがて来世の存在の原因になる。私たちの命の根本のところ、そういうものがあり、それが一貫性を持っていると唯識は捉えたわけだ。

こうした捉え方は、現代の我々にもかなり納得できる。例えば、夜ぐっすり眠ってしまおうと、五感や意識の働きは止まる。そういう意味で、心の中で何かが起こるということではなくなくなってしまおう。しかし、翌朝起きると、きちんと自分が誰かわかる。私は私だと思おう。それは、記憶アライヤ集積されていた情報がふたた

び意識に呼び出されてくるからである。その情報が、昨日の夜と今朝とほぼ一貫しているから、私というものがいるという意識を持てるわけだ。輪廻はともかく、眠りと目覚めの間に起こることは、アーラヤ識という概念とよく一致していると思う。

さて、アーラヤ識・情報の集積体は、ある時に、ある形をとり、ある一貫した流れを持つが、集積したものであるから、分散してしまえばなくなる。そういう意味で、実体ではない。ところが私たち凡夫・すべて生命あるものは、一貫したものであるので、それを実体的な「我」だと思い、それに執着するようになるのだという。それが〈執蔵〉である。

ここまで述べてくると、「撰大乘論」は生きた実感から理論化されたものだということを、少し感じていただけるかもしれない。一見確かに難解な文体で書かれているが、ほぐして理解していくと、私たちの生きている姿を実感的によく捉えている。

つまり、私たちは、意識の存在しない過去にどこかで生まれた。何の理由もなくポーフラのように湧いてきたのではない（考えてみると、ポーフラだってきちんと親の蚊がいてタマゴを産んだから湧くわけだ）。そうすると、過去の何かが自分を生み出した以上、自分が死んだ後も、ただ死んで終わりというのではなく、何かが残るだろうと推測したくなる。それを科学的な用語で「遺伝子情報」と言い換えてもいい。少なくとも、私たちは、過去の親の遺伝子情報を受け継ぐことよって、いまの存在形態を持っているのだし、子供がいれば、自分の遺伝子の半分を子供に伝えているわけだ。父と母の遺伝子情報がうまく一体化しなかったら、私たちは存在していないし、父と母からもらった遺伝子情報が歪むと、いろいろな病気になつたりする。

だから、科学的な言い方で言えば「遺伝子情報」が、私たちの命を生み出し、ある一定期間維持してい

るのであり、それが狂ってしまったら、生存そのものが危うくなる。私たちは自然科学的に見ていっても、実体として存在しているとは言えない。しかし、ある一貫性・持続性があるために、それを見て実体Ⅱ我だと思ってしまうのだ。

以上のように、アーラヤ識が「蔵識」と言われるのは、このように、蔵に蓄え（能蔵）、蓄えられ（所蔵）、それに執着する（執蔵）という三つの意味があるという。

#### 命の維持・執着作用

すでに「執蔵」という言葉で表現されているが、心の底には命に執着し、それを維持する働きがあるという。そのためアーラヤ識は「執持識」とも呼ばれる。「執着し維持する識（執持識）」は、深く微妙で、存在の種子は、常に流れている。凡夫に対しては、私はそれを説かない。彼が、それに執着して実体的存在（我）と見なすことのないためである」（四三頁）と述べられている。

私たちは、例えば、生まれる前、母の胎内から心臓が動きはじめており、死ぬまで動いている。呼吸も、まずヘソの緒で、母の胎外に出てきたら肺で呼吸を始め、死ぬまでは特に意図しなくても肺呼吸をし続けている。そのように心臓や呼吸は、意識的にしようと思わなくても、きちんと体のほうでしてくる。「ちょっと忙しかつたので、心臓を動かすのを忘れた」といって死ぬ人はいないわけだ。

つまり、私たちが自分で気がついて意識よりも非常に深いところに、自分の生命に執着し、それを維持している働きがある。そういう意味で、アーラヤ識は「執持識」とも呼ばれる。サンスクリットでは「アーダーナ」、執着するという意味である。

そういうふうに、私たちが生きているのは、五感や意識では気がついていない部分の、生命に執着し、

生命を維持する働きによっている。現代の生理学や脳科学の次元からも明らかのように、例えば脳がたえず心臓に動くように情報を送っている。例えば、私たちが外側のことを見て、「あ、危ない」と思うと、心臓が早く打ち、それに対応できるように、血流を多くするというふうに対応する。命を維持するための働きは、意識や五感の働きよりもっと深いところで働いている。現代の生理学や医学で言われる「ホメオスタシス（生体のバランス維持機能）」「免疫」「自己治癒力」などは、唯識的に言い換えれば、アーダーナ識即アーラヤ識の働きということになる。当時はもちろん自然科学はなかったわけだが、唯識は、そういう私たちの生きている事実を、いわば体験的に洞察していたのだと言っていだらう。

#### 凡夫は実体と錯覚する

先の句にあるとおり、アーラヤ識は、非常に深く微妙で、ものという現象を生み出す種子である。それは、たえず一貫して流れている。しかしアサンガはここでははっきり、誤解を生まないように「凡夫に対しては、私はそれを説かない」と言っている。

常識的に聞くと、アーラヤ識というものが実体としてあり、そのアーラヤ識とどのように自分が関わっているのかといった疑問が出てくるようで、唯識の講義をしても、しばしば「アーラヤ識は靈魂とどう違うのか」「仏教でアーラヤ識を認めているということは、靈魂を認めているということではありませんか」といった質問を受ける。

しかし靈魂は、それ自体の性質を保ち続けるといふ意味である種の「実体」である。それに対して、アーラヤ識は実体ではない。ある情報の「集まり」であり「流れ」なのだ。ところが、一定の一貫性はあるので、ほとんどの場合、実体と誤解される。



實際ひとごとではなく私たちも、ほとんど例外なく、自分の命を实体として感じてしまっていて、「人は私が幸福になるためにある」「何が何でも私は幸福になりたい」「何が何でも私は死にたくない」と思っている。なぜか、いつの間にか、強く執着している。

なぜかはわからないが執着しているという事実をしっかりと見ていくと、それは心の非常に奥深いところに執着の元になっているものがあるからだと思づく。執着の元は、決して私が意図的に執着するかしないか決めて持ったわけではないにもかかわらず、自分の命の非常に深いところにしっかりと存在している。そういういわば「実存状況」としての事実を見つめ、はつきり自覚するために、仮にこういう理論や言葉が作られたことを理解しないと、言葉を聞いたとたん、またしても「アーラヤ識」という実体があると誤解する危険があるだろう。

それは、『解深密経』の著者もアサンガもまったくも恐れたところで、「凡夫にはそれを説かない。なぜならば、彼がそれに執着して、実体的存在に我だとみなすことのないように、そういうものがあることを凡夫には教えない」と言う。

わかりやすくするために、時々、現代科学的な言い方を借りるが、もちろん当時の人たちにそういう科学的知識があったわけではないし、筆者も現在の物質還元主義的な科学で心がすべて説明できるとは考えていない。しかし、唯識の洞察と科学的な認識に重なるところがあるのは確かなので、理解の助けになるところでは、科学主義的な説明も援用することになっている。

例えば、私たちが、別に目の働きを維持しようと思わなくても、朝目を覚ますと、特別に病気でないかぎりには、きちんと目が見える。特別、夜のうちにこなしておこうと意識的に働いたわけではない、昨日食べたものはきちんと胃腸で消化されている。そういうふうに器官を維持していく働きが行なわれて

いる。また、外部から細菌が入ってきたら、眠っていてもただちに免疫反応という形で対応して、命を守ろうとする。

唯識学者たちは、意識よりも深いところに執着し維持していく機能があり、それが命の中核であること、を内省的に洞察していた。それを蔵Ⅱ（アーラヤ識）と呼んだり、執着する識Ⅱ（アーダーナ識）と呼んだりしたので、ということを押さえておきたい。その洞察の中核にあるものは、時代を超えて深くかつ妥当だと思ふからである。

#### 自分への執着の源泉としての意

アーラヤ識あるいは識は、時に「心」と呼ばれる。「撰大乘論」には、「仏世尊が「心・意・識」と言うとおりである」（四四頁）とある。その「心・意・識」は同義語か同義語でないかという議論が仏教学的にはあったようだが、「撰大乘論」は、同義語ではないとする。広い意味での心の、それぞれ別の側面を説くために、「心」「意」「識」を使い分けるのだとする。中でも〈意（マナス）〉と呼ばれる心の働きは二種類あるという。

①まず、仏教では、私たちの存在や心の働きすべては、ずっとつながっているように見えるけれども、実は一瞬一瞬、滅びては起こり、起こっては滅びているのだと考えており、それを「刹那滅」という。「刹那」とは非常に短い瞬間のことである。

これは、映画のフィルムに譬えるとよくわかる。フィルムは、一コマ一コマに分かれているのだが、一定の早さでフィルムを回すと、人間の目には連続し一貫しているように見える。それに似て、実は心の働きの一瞬一瞬は切れているのだが、消えた次の瞬間またほとんど同じものが起こり、また消えてまた次に

起こるので、続いているように見えるのだという。

前の心の働きが起こって消えた次の瞬間に、それとよく似たしかしわずかに違う心の働きが起こる。前の心の働きが、次に起こる心の働きの条件になっている。それを「次第縁」と言う。その前の心の働きのことを「意」と呼ぶ場合もある。これはこれで、心と時間の関係の捉え方として、なかなかおもしろい。

②しかし唯識の人間洞察としては、次がきわめて重要である。漢訳では〈意〉、サンスクリット原語では〈マナス〉で、「思い量る」「考える」ことを意味する。しかもただ考えるのではなく、すべてを分けて別々に思う、つまり分別するるのである。

私たちが何かをわかる（つまり「分かる」場合、例えば「これはチョコレートである（お菓子ではなく）」、「これはチョコレートである（プラスチックの棒ではなく）」というふうに、必ず「〜である（〜ではなく）」ということを含んでいる。白いと思うことには、それは赤でもなければ黄色でも黒でもないということが必ず含まれている。そういうふうに他のものと分けて分かる心の働きを〈意〉という。

しかも、すべてを分けて分かる心、〈意〉は、唯識によれば「汚染された意」という。この把握が実的に確で深いと思う。私は、それまでわからずずっと考えめぐねてきて、唯識を学ぶことになって「なるほど、そういうことなのか」と、ほとんどひらめきのようにわかったことは、人間の心の非常に奥深い層には実に様々なトラブルを生み出す働きがある、それは〈意〉（ヴァスバンドク）の用語では〈マナ識〉における四つの根本的な煩惱だ、ということだった。

人間の命や心が、ある意味で情報の集積であり流れであることは、言われてみれば頭ではわかる。自分がいなくなった過去があり、自分がいなくなる未来がやがては来るだろう。まわりの人を見てみると、死んでいくし、その死んでいく人と自分は同じ人間だと思うと、自分もやがて死ぬんだと思う。言われてみ